

書 評

上杉和央 著

『江戸知識人と地図』

京都大学学術出版会 2010年2月

366頁 4,200円＋税

書名のユニークさが物語るように地図史研究に目新しい視角を提起する啓発的な一書である。これまでに著者が本居宣長や森幸安の地図収集に関する研究を行っていることは見聞きしていたが、それは意外な地図コレクターや謎のカルトグラフィアーの実像の解明といった個別的な特殊研究と鵜呑みして、私は著者が真に意図していたところを見抜けなかった。今回刊行された本書を通読してはじめて著者の意図していたところを感得できた。

古地図を題材とする研究は極論すれば、従来は伝統的な発達史的研究と過去の地域を復元する歴史地理学的研究に片寄っていた。ところが近年は国外の研究の潮流にも影響されて地図研究に新たな視角が呼び起こされ、わが国でも例えば葛川絵図研究会など新しいパラダイムの構築をめぐる活発な議論の展開をみて、その成果が『絵図のコスモロジー』上下2巻（大明堂）などの成果を生んでいる。このように絵図研究の多様化が進んで、絵図に関わる諸事象を歴史へ組み込むための歴史家と地理家の協力もみられるようになった。

また他方、近年は近世における学びと遊びの分野についてさまざまな視点から研究がなされて、その成果も多彩である。本書の著者もこのような絵図研究の新たな動きの中で、絵図を複合した諸現象の中で解釈していく必要があるとして、地図作成を一つの知の形成ととらえ、文化的・社会的・政治的コンテクストの時代背景で地図収集家があらわれたことを解明している。

本書は著者がこれまでに発表した論稿を加筆・修正し「江戸時代の知識人と地図」というテーマのもとに再構成して刊行したものである。本書はまず序章の「知識人たちの森へいざなう地図」があって、本論は三部から構成されている。第一部は「本居宣長の地理的知識」、第二部は「江戸期最大の地図作製者、森幸安」、第三部は「地図と

十八世紀の社会」である。

序章では研究の目的と方法を理路整然と説明しており、著者の文章は流れがよくて説得力に富んでいて読者を自然と先へと読み進ませる。この部分を読むだけで本書全体の構成と内容のあらましを感知できる。本居宣長と森幸安という二人の人物の個人的な地図収集を題材にし、最後は大坂天満宮の祝部、渡辺吉賢を中心にした地図の貸借による人々のつながりを焙り出して、わが国18世紀には知識を共有する知識人たちのネットワークの存在したことを論証せんとする。つまり個人に焦点を当てた「木」を見ることから始めて、知識人たちのつながりに視界を広げ、18世紀には地図収集の仲間という「森」ができていたことを実証し、そのような現象を生み出した当時の社会・文化・政治の背景を検証するというのである。

本居宣長をとりあげる第一部では第一章「青年期宣長と地図」、第二章「宣長の教育と地図」、第三章「宣長と世界図—地図貸借と利用の観点から」から成る。宣長がまだ小津栄貞と称していた青年時代に描いたという2枚の地図「端原氏城下絵図」と「大日本天下画図」を題材として、地図作成と地理的知識形成の関連を論じている。その1枚の「端原氏城下絵図」は京都をモデルとした架空の都市図であるが、単なる場当たりの地図ではなく、主家である端原氏の居所を中心に市街を描いていて、その図示内容は別途作成した端原氏一族の系図に対応しており、一族の分家屋敷や住所表記の通り名称までも整合しているという。

もう1枚の「大日本天下画図」は当時としては比較的「かたち」の整った日本図である。この日本図は当時巷間に流布していた石川流泉の『日本海山潮陸図』が手本にされたことと著者は推定しているが、それを無批判に写したのではなく、東北地方などは『大増補日本道中行程記』などをも参照して図形が正されているという。この日本図には3,000余の地名と全国254名の城主名を記しているが、単に刊行図の記載を書き写すのではなく、地名を補充し、城主名は武鑑などの情報をもとに修正が加えられているという。

著者は本居宣長が青年期に描いた上記2枚の地

図描画は、作者が実用を意図して描いたのではなく地理的な好奇心の発現とみなしている。宣長は成人して国学者の地位を確立した後も自らの研究には地理知識や図的理解を重要視し、地図を基礎的な資料として位置づけていた。上田秋成との「皇国」論争で知られるように、地理的知識は彼の思想に少なからず反映されている。宣長が日本全国の図的把握を素養と考えたのは安永期以降であって、多数の地図を息子の春庭に模写させて収集していた。地図を含めた図書の書写作業は息子の知の形成という教育的効果をも期待していたという。春庭の書写した図書は160点に及び、そのうち50枚ほどは地図であった。現在本居宣長記念館には80枚余の地図が保存されているが、それには日本諸国の国図の多いのが目立つ。宣長はとくに国々の絵図に関心を示し、各国の国図を網羅的に集めようと意図して春庭に模写させていたとみられている。

18世紀には地図の出版が多くなったとはいえ、幕府や諸藩の作成した官撰地図は刊行されることはなく、詳細な地図を収集するには自らの交友関係を通じて地図を借り受けて模写するしかなかった。宣長親子の地図への執着は個人的な知的な営為であるが、それが当時の社会的な文脈と重なって展開したものと著者は解釈している。宣長は門人や同門の者たちの交友関係を仲介して地図の貸借を行っており、残された書簡を精査して地図貸借の実態を明らかにしている。

森幸安をとりあげる第二部は第四章「ナゾのカルトグラファーの実像」、第五章「森幸安の地誌と地図」より成る。森幸安は大量の模写図を作成した特筆すべき地図の多作家としてその名が知られていながら、最近まで具体的な人物像が明らかではなかった。近年国際日本文化研究センター・文化資料研究企画室の科研プロジェクト「分散技術を応用した歴史地理情報基盤の構築」（森洋久代表）によって諸所に分散所蔵されている森幸安作成地図の悉皆調査がなされ、その成果が『森幸安の描いた地図』（日文研叢書29, 2003）として報告され、幸安の「カルトグラファー」としての仕事の概要が明らかにされた。しかし幸安は京都茶磨屋町にて出生し30歳の頃大坂に移っているが、幼名を「金吾」と呼ばれていた京都での幼年期から青年期までの動静はまったく分からないまま

で、家業はおそらく画工ではなかったろうかと推測されていた。ところが著者は幸安自筆の史料を精査して、幸安は幼い頃は禁裏や公武を相手にする香具商の恵まれた一族の下で生まれ、やがて本人もそのような職を継いでいたことを突きとめている。そして幸安自身が後年描いた京都の市街図を読図して御所や幕府大工頭の中井家などの近くで暮らしていた幸安の京都での生活空間をも具体的に明らかにしている。

森幸安による多種多様な地図作成が日本全体を視覚的に表現しようとする「日本志」構想によっていたことは先学の研究によって明らかにされ、幸安の仕事の地図史上の位置づけについてもすでに一定の見解が示されていた。著者は先学によるそのような重要な成果を評価しながらも、先学らは幸安の業績を地図作成の観点でのみ判定して「カルトグラファー」であることを自明のものともみなしてしまったと批判している。幸安は400枚以上の地図を残したことから確かに「カルトグラファー」と呼ぶにふさわしい仕事ぶりであるが、彼が地図を作成しはじめるのは50歳近くになってからであって、40歳頃からは主として地誌作成に専念していたのである。

『日文研叢書』の報告でも森幸安の作成した地誌の目録化がなされていて、幸安が本格的に地図作成を始める前に地誌の作成を行っていたことは知られていたものの、幸安の地誌作成は地図に従属した副次的な仕事とみなされていた。著者は「幸安にとっての地誌は地図のオプションであったのではなく、むしろ地誌が大きな比重を占めていた時期があり、その後、地図へと関心が移行ないし拡大していったと判断すべきではないか」と問いかけて、「地図作成のみに焦点を当てるだけでは、幸安の『実』に迫ることはできない」としている。同じ地理情報を記すメディアであっても、図で表現する地図と文字で表現する地誌では読者の受ける認識は異なる。幸安には「カルトグラファー」ばかりでなく「トポグラファー」としての一面のあったことを著者は重視しているのである。このような著者の見方はこれまでの森幸安像に関して変更を迫ることになる。

著者は森幸安の作品に地誌と地図がどのような関連があるかを探ろうと、幸安作成地図の具体的な分析を試みている。幸安が作成した多種多様、

多地域、大小スケールの地図群の中で、京都・山城国に関する地図が下書き図と思われるものを含めると47点も確認できるという。地図を本格的に作成し始めた寛延2(1749)年の段階には「志」(書)と「図」を相補的な関係としてとらえ、両者を不可分な関係とみなすようになっていた。この時点での幸安は「図書」作者、トポグラファー兼カルトグラファーと呼ぶのがふさわしいような態度で地誌と地図に向き合っていた。当初、「日本志」という地誌作成の構想をもった時点では地図の考えはなかったようだが、やがて「志」(書)と「図」の備わる「図書」という構想が浮かんで、自作の京都に関する地誌を地図化する作業に着手している。地図に歴史を折り込む必要から幸安は上古・中古・近世と時代を区分して京都図を作成しており、「中古京師内外地図」と「近世京師内外地図」が残っていて、幸安の歴史アトラスの構想が読みとれるという。

しかし、やがて畿内以外の地図を大量に作成しはじめて「日本輿地図目」として天文図からはじまり、世界図・日本図・地域図というスケールによる地図の配列によって地図どうしの関係が重視される。それでも地誌との関係を忘れ去ったのではなく、幸安の地図の特徴として、地図の余白に記される詳細な文字情報は彼の「図書」という思想のたどり着いた結論であった。地誌と地図による相補的形式として彼の「図書」の思想にもとづいて「日本志」構想は完成したと著者は考えている。

第三部は第六章「地図貸借から見える知識人社会」、第七章「博物学と地図収集ネットワーク」、第八章「三才須知―地図収集の政治・思想的背景」より成る。第一・第二部が宣長および幸安の地図収集に関するいわば個別・事例的研究であったが、第三部は既述の事例的研究を踏まえて18世紀における知的社会の形成を普遍化する総括的論考である。

大坂天満宮の祝部であった渡辺吉賢は木村兼霞堂とも並ぶ好事家として知られていて多くの地図を所持しており、それを秘蔵することなく知人に貸与していた。とくに森幸安は吉賢から多くの地図を借用して模写していた。吉賢から借り受けた地図は87枚に及んでおり五畿七道のみならず蝦夷や朝鮮図などまで含んでいて、幸安の地図収集は

吉賢からの借用に大きく依拠していた。吉賢の地図収集もまた人的交流によるものであった。年齢差のあった木村兼霞堂は晩年の吉賢と交流を持ち、吉賢の実子で同じ天満宮の祝部であった渡辺吉豊との関係が親密で、渡辺家との交流を通じて吉賢収集の地図を活用していた。

著者は吉賢が地図貸借に関係した人物を具体的に割り出して、吉賢とのつながりで出来ていた地図収集のネットワークの存在を明らかにし、それを図化している。そのネットワークは身分・職業・地域を問わず、直接・間接的なつながりにて22名にも及んでいた。18世紀中葉には地図愛好者を軸にする知識人の広範なネットワークが成立していたのである。

18世紀前半にはわが国で出版文化が開花して、大量情報が一般民衆へも供給されるようになったが、メディアにのらないより専門的な知識を求めた知識人たちの間には図書の貸借ネットができて、書写という手段による「知」の収集がなされていた。確かに18世紀におけるこのような現象は著者が考えるような時代背景が主因であろう。ところで幕府や諸藩によって精度の勝れた官撰地図が作成されても官庫に秘蔵されてしまい、民衆はそれらを実際に披見できないという制約が、民間の知識人層により高い知識を希求させて地図の貸借による書写という営為を生みだしたのだろう。また大坂天満宮は大坂文芸の中心地の一つであって連歌の奉納がなされていたというが、太宰府天満宮の事例¹⁾が報告されているように地図奉納も行われていたのではなかろうか。

ところで、ここまでで得られた成果をもって、これをゴールと思い込んではいけぬ。著者が世に問わんとする見解は最後の章にて提起されている。これまでに登場した人物の地図コレクションは森幸安の「日本志」構想、本居宣長の「国図」への特化、木村兼霞堂の「好事家」、渡辺吉賢の「異物あつめ」というように収集内容の傾向がある程度浮かび上がった。このような傾向は18世紀に熟成した博物収集文化に関係するとみなしている。博物収集文化は17世紀末から18世紀初頭(元禄～享保期)に萌芽して18世紀中葉(宝暦期)に成熟したと著者はみている。博物学的関心は將軍吉宗の本草学への傾倒によって一層喚起され、正しい「知」を求める社会ないしは文化が知識人層

の間に広まり、そのなかで産物や書物が積極的に収集されるようになった。

著者はこのような現象を「収集文化」と呼んでいる。地図収集を地図という限定的な範囲にとどめず、18世紀の経済的に豊かな知的社会層に広まった博物的関心の一環として「収集文化」というより広い枠内に位置づけている。著者は「形状之真」の観察こそ重要と明言した貝原益軒の思想に行き着き、より正確な「かたち」を求める態度は地図をめぐっても確認できるという。青年期宣長のかたちの正しい日本図の作成は、将軍吉宗の享保日本図作成にも通ずるだろう。浮世絵師石川流泉の美しい日本図が安永2(1773)年版を最後に姿を消し、同8年に出版された長久保赤水の『改正日本輿地路程全図』が世間を席卷した。

著者は最後に地図史研究を単に地図の系譜をたどるだけではなく時代の他の動向をも見据えた文化史、社会史のなかでとらえるべきだと提唱している。ただ「収集文化」へ話を広げれば地図史は博物文化史への拡散を危惧しないわけではないが、著者は収集文化における地図ないしは地理的

知識の位置づけをしっかりと確認していて足場は固まっている。従来森幸安や木村兼霞堂のような地図コレクターの存在は知られていたものの、これまで地図史研究でそれを近世の学文という視点でのアプローチはなされてこなかった。本居宣長や渡辺吉賢などの地図収集はこれまでほとんど知られておらず、今回幸安や兼霞堂の地図収集と合わせて「地図を好む」人たちの存在が具体的に明らかになった。地図をモチーフとしての人々のつながりを徹底して追及した著者の根気には感銘を受ける。本書は地図史研究に新たな側面を補填する労作である。

(川村博忠)

〔注〕

- 1) 渡辺美季「竹森道悦と地図奉納—『世界図』・『肥前長崎図』の紹介を中心に」九州史学146, 2006, 1-41頁。同「竹森道悦と太宰府天満宮—奉納された地図をめぐって—」太宰府を語る会誌18, 2007, 6-20頁。